

# The Distinction between Using and Mentioning a Dream

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/44862">http://hdl.handle.net/2297/44862</a>

## 〈夢の使用〉と〈夢への言及〉

中村直行

柴田先生か私を呼んで下さった呼び方にはさん付けと君付けがある。それも時期により異なり、哲学者の進展に喩えるに、前期・中期・後期がある。前期の「さん」付けは私の NIT 時代であり、学会で「中村さん」と声を掛けて下さった。中期の「君」付けは、門下生として師事した時期であり、博士課程の受験の日からそう呼んで下さった。後期の「さん」付けは博士課程を修了してからでまた「中村さん」に戻ってしまった。世間の常識から言えば、「君」付けよりも「さん」付けが上であろうが、中村にとってみれば、中期「中村君」がもっとも格上である。アカデミックな柴田先生のふところにより近く潜り込めた感じがしたからである。

### 0 はじめに

人は何のために眠るのか。何らかの科学物質が閾値を超えて多く溜まった時にそれを排出したり分解するために眠るのならば、何も貴重な時間を睡眠にあてなくとも、その化学変化を起こすようなものを摂取すれば良いように思う。しかし脳科学か認知科学かその門外漢の私にはわからないが、寝ている間に脳が要る情報と要らない情報を分別していると聞く。人間というものは生き物と言うよりは情報科学的な存在なのだろうか。そしてある哲学者が言うには夢は睡眠の番人である。

このように夢を本稿に導入した上で、「夢を見ている」と言う事は言語に成し得ないことであることを、「言語の使用と言語への言及は両立しない」という立場から論証してみたい。「言語を使用すること」と「言語で他の言語へ言及すること」とパラレルに、夢についても「夢を見ている(夢の原体験を感じている)こと」と「夢を思い出す(原体験から夢を制作)」を考察してみたい。しかしそれは言語によって表現できないことも何とか暗示してみたい。

### 1 〈夢の中の夢〉と〈夢についての夢〉

〈夢の中の夢〉と〈夢についての夢〉も区別すべきであろう。

大森はこう言う。「劇中劇のように夢の中でまた夢を見たということはある。しかしその時の夢語りは第二次の夢についてであって、当の夢についてはない」。

ここは「〈メタ言語と対象言語〉との関係」と「言語の限界」を彷彿させる。メタ言語は

対象言語について語れるし、メタ言語は対象言語の構造（例えば、主語述語関係、句点で完了する一文という単位、段落関係など）さえも語れる。しかしメタ言語は自らの構造は語ることはできずに、棚上げである。そしてメタ言語の構造を語れるのはメタメタ言語である。そして注意を喚起しておく、「言語階層」と「使用・言及」は区別すべきである<sup>2</sup>。

## 1-1 夢の中の夢

「はっ」と目が覚めた。「どこだ？ここは」。自宅であったが、浴室にいた。寝ていた確信はないが、目が覚めたのだからその直前まで寝ていたのだろう。意外なことだが状況証拠からして、どうやら浴室のいずかに座ってシャワーを浴びながらそのまま眠ってしまったようだ。たいていは目覚めると、どんな夢を見たのかを思い出そうとして再生するのだが、今はそんな余裕はない。タオルが浴室の排水溝をふさいでいて、シャワーから流れ続けていたお湯が行き場がなくなりあふれ返り、浴室の床からドアの下の隙間をくぐって浴室の外に溢れ出る勢いだからだ。タオルを拾い上げ、シャワーを止めた。寝ていたのだからどんな夢を見ていたのかと興味を持つ余裕ができたが、夢を見なかったのか、その時は思い出せなかった（制作できなかった）。

そして私はまた目覚めた。気づくと私はいつものとおり布団の上で寝ていた。いまほんとうに目覚めた私は、シャワーを浴びながら目覚めたという夢を再生し始めた。珍しい夢をみたものだと思い、思い出してみた。「「はっ」と目が覚めたのだったな」。「本当にいきなり、「はっ」とした目覚めから始まる夢だったのだろうか？」。ゆったり散歩していて、突然走り出す夢があるように、「はっ」とする前の状況も夢の中で見ていたのではないかと、思い出そうとする。しかし、その前をいまほんとうに目覚めている私であるのに、その前を思い出せなかった。制作しようにも、そういう場面はなかったようだ。

「なんだ、結局は夢だったのか」という読者からの声が聞こえそうである。覚めたのだから、二つとも夢だったのだ。いや、夢は一つしか見ていない。だから「夢の中の夢」は誇大タイトルであって、正直に正確に言うと「眠りから覚めた夢」を見たのだった。シャワーを浴びたまま目覚めた私が、目覚める前に見ていた可能性のある1レベル深い夢をフィクションとして制作してしまえば、「夢の中の夢」と言えるだろう。

しかしそれは論理的可能性として、ある人には起こり得るのだろうが、私は一度もできた試しがないので、あえて創作はしなかった<sup>3</sup>。シャワーを浴びたまま目覚めた私が、目覚める前に見ていた（と期待される、見てもない）1レベル深い夢を1レベル浅い夢の中で制作することが何らかの制約（例えば、記憶容量の限界。限界でなくとも無理をすると睡眠の番人どころか、かえって眠りから覚めやすくなり安眠上逆効果になる等など）で、人間はそうしない仕様なのかもしれないので、やらせはしなかった。

しかし大事なことがある。私は夢の中で夢は見えていなかったものの、眠りから覚めて現実世界へと戻ったと言う現実感があつた。しかしそれも覚めてしまえば夢である。もちろん夢を見たことを思い出して<sup>4</sup>こそ、現実と思われていた体験や現象を夢というふうに再評

価するのであるが、ところが大事なことを最後まで言い続ける前に、不正確にしか伝わらないような気がしてならない。そこで同じ夢の内容だが以下ではあるわかりやすい（人によってはかえってわかりづらい）記法を導入して、二つの要素から決定される関数のように夢を表現してみる<sup>8</sup>。この記法を用いることは一長一短があるろう。複雑だが精緻な記法は後々の誤解を防げるのが長所であるが、読者によっては毛嫌いされるのが短所であろう。だから、読みづらければ、かつこやその中の英数字は無視して「夢」の一字だけを見てもらえばよい。「夢」の意味は夢ということにしておこう<sup>9</sup>。

この記法を用いることの意図は、〈夢を使用すること〉と〈夢へと言及すること〉の区別を示すことにある。では、「はっ」と目が覚めた。「どこだ？ここは」から「制作しようにも、そういう場面はなかったようだ」の16行をかえって、ややこしい表現を使って置き換えたり、追記してみる。

「はっ」と目が覚めた。「どこだ？ここは」。自宅であつたが、浴室にいた。寝ていた確信はないが、目が覚めたのだからその直前まで寝ていたのだろう。意外なことだが状況証拠からして、どうやら浴室のいずかに座ってシャワーを浴びながらそのまま眠ってしまったようだ。たいていは目覚めると、どんな夢 (t1, d)<sup>8</sup>を見たのかを思い出そうとして再生するのだが、今はそんな余裕はない。タオルが浴室の排水溝をふさいでいて、シャワーから流れ続けていたお湯が行き場がなくなりあふれ返り、浴室の床からドアの下の隙間をくぐって浴室の外に溢れ出る勢いだからだ。タオルを拾い上げ、シャワーを止めた。寝ていたのだからどんな夢を見ていたのかと興味を持つ余裕ができたが、夢を見なかったのか、その時は思い出せなかった（制作できなかった）。（追記による解説：以上の10行の夢が (t2, r)<sup>9</sup>である）

そして私はまた目覚めた。気づくと私はいつものとおり布団の上で寝ていた。いまほんとうに目覚めた私は、シャワーを浴びながら目覚めたという夢 (t1, d) を再生し始めた。珍しい夢をみたものだと思い、思い出してみた。「「はっ」と目が覚めたのだったな」。「本当にいきなり、「はっ」とした目覚めから始まる夢だったのだろうか？」。ゆったり散歩していて、突然走りだす夢があるように、「はっ」とする前の状況も夢 (t2, d)<sup>10</sup>の中で見ていたのではないかと、思い出そうとする。しかし、その前をいまほんとうに目覚めている私なのに、その前を思い出せなかった。制作しようにも、そういう場面はなかったようだ<sup>11</sup>。（以上で書き換えと追記は終了）

では、大事なことの続きから終りまでを話そう。いま論文に載ってしまった夢 (t2, d) の中でのことだったが、夢 (t1, d) は見ていなかった（中身は空っぽだった）が眠り覚めたから、今は現実（目覚めている）と判断できたところの現実感のある夢 (t2, r) は時刻 t2 の直前までの当時は現実だった（今となっては夢 (t2, d) や夢 (t1, d) たちの仲間入りだ）。夢 (t1, d) は空っぽだったが、夢 (t2, r) が夢 (t1, d) を想起しようと大森的に制作し

ようと試みたことだけは確かだ。その制作を試みる間だけは夢 (t2, r) は使用中だったので、その間は現実だったことに (過去制作説に依っても) なるだろう。

そして夢 (t2, r) を現実感によって取り囲んで夢 (t2, d) へと追いやった相対的な現実もある条件によっては、夢 (t3, d) になる。ある条件とは、その相対的な現実 (t3, r) を夢 (t3, d) たらしめる現実 (t4, r) がやって来た時である。しかしその現実 (t4, r) はまだ覚めていないだけで、実は夢 (t5, r) なのかもしれない。しかしそうでなくて、現実 (t4, r) は私が死ぬまでずっと現実であり続けるかもしれない。これこそが現実かと言えば、現実を「いつまでも検証されない覚めぬ夢」と呼んでもいいのではあるまいか。

われわれは、少なくとも私は、夢の世界と現実世界とを往復する。そして相対的に現実感が強いだけの現実世界の中に、相対的に現実感が弱い現実を押しこんで取り囲んで、「夢だたん」<sup>12</sup> と言い直す。夢と現実とは両立しないゲシュタルトチェンジとようだが、しかし夢を見なくとも夢の世界に行かなくとも、現実世界の中だけでもその中に現実と夢が入り混じっているのではないか。

例えば、ある女がある男から愛されているとしよう。それは愛されているという充実した現実感からして、彼への信頼からして、本当の実際のことであるに違いない。彼女はそう確信しているというより、疑うこともなく自然に現実として受け止めている。そして男は仕事を終え、彼女のもとを去った。彼は結婚詐欺師であったのかもしれないし、スパイであったのかもしれない。結果として彼は彼女のもとを離れていった。

## 1-2 夢についての夢

夢についての夢とは以下のような夢のことである。夢を見て覚めてその夢についての夢を見る。筆者は一度覚めて夢だと分かったが、二度寝してその夢についての夢を見たことがある。少し具体的なストーリーを述べると、(夢だとはその真つ最中には気づかずに<sup>13</sup>) 現実だと思って、妻と話していた (妻と話すという経験をしていたつもの) 夢がある。その夢を夢 (t1, r) と書く。そして覚めてしまえば夢 (t1, d) だったということになった。

そして二度寝して「妻と話していた」というその夢 (t1, d) を二度寝の夢 (t2, r)<sup>13</sup> の中に持ち込んだ。その二度目の夢 (t2, r) もその真つ最中には夢とは気づかずにいるが、一度目の夢 (t1, d) のことは夢<sup>14</sup>となぜかしら知っていた<sup>15</sup>ので、二度目の夢 (t2, r) の中では、こんな会話になっていた。「さっき、君と話していた。いや、それならそんなことわざわざ言わなくとも、話相手の君だって、ぼくら二人で会話したことを知っているよね、思い出せるよね。だからその会話は夢<sup>16</sup>だったんだ。まさか同じ夢を見たわけでもないし、もし、そうだとしたらそんなことは知らないだろうからね<sup>17</sup>。私が見た夢だから、わざわざ言わないと分らないと思うから言うんだけど、君と話している夢を見たんだ …」。

このように夢 (t2, r) の中に持ち込まれた夢 (t1, d) は、夢だと私が自覚しているので、夢 (t2, r) の中で、夢 (t1, d) のことを相手に (初めて) 話さなければ、話相手と夢 (t1, d)

を話題として共有できないことを知っている。だからこそ夢 (t1, d) のことを相手に話したのだ。

この二つの夢では、対象-夢 (t1, d) にメタ-夢 (t2, r) が語っているわけだ。ある夢がもし無言で映像だけが流れる視覚言語の夢であっても、その夢であっても対象-夢とメタ-夢はありうる。

## 2 夢と現実の相克

今は戻ってこない。ところが (生きている限り) 今はまたやって来る。

愛する者を失えば悲しい。なぜならばそれは二度と逢えないからだろう。しかし再現しないという点では、愛する者と出会った (必然なのか偶然なのか) 喜ばしい時も戻っては来ないし、若い頃の元気で健康な自分も戻っては来ない。輝く今も言葉「今」で表現しようとしたとたんに、今ではなくなってしまう。

上記を貫いている共通点は、喪失感でも後悔でもない。今は何度もやってくる。しかし、この今は再現しない。それが理由で、悲しさも寂しさも後悔も湧いてくるのではないか。そして「今」と言うよりも「この今」と言いたくなる<sup>18</sup>。そして「この今」だけが今なのだ。

なぜならば、今は今ではない。「今」などと言葉で客体化されるような、言及されてしまった時刻はない。

類例として「自分」を挙げよう。自分とは客体化されるまでの一心不乱な者である。しかしこの言明は擬似命題となって無意味と化してしまっている。すでに「自分」について言及してしまっているからである。言葉で言い表し得ぬ——それゆえに事実とは言えないが、しかし「本当」と言いたくなる——ことがある。

自分にとって不利になる (しかし公共のためにはなる) 行為に至る人がいる。しかしその人が、「自分を自分だと思っていない (意識していない、特別視していない)」と言葉にしてしまえば、その言明は故意のうそつき (偽) か矛盾か、いや無意味となるであろう。もちろんその人の行為はまさに無心、捨て身、無自覚、損得勘定無しなのである。つまり自分を滅しているのだから、「自分を自分だと特別視していない」と言ってもよさそうである。そう言われるだけのことをしている。しかし言葉にはその表現力がない。「自分を「自分」だと特別視していない」という言葉によって、寝ていた我を起こしてしまう。言語が認知を変化させてしまうからだ。

「わたし」と言おうかな、それとも「わたくし」と言うべきかな、と客体化された「私」はずでに私ではない。この指摘は周知の "I" と "me" の違いを問題視しているのではない。たしかに、「痛い!」、「つら〜い」など主語の "I" がいないがゆえに言語によって客体化されていない場合もあるが、「なんで、今に限って急に雨が降って来るんだ」には暗黙の目的語 (対象を指示する語) が隠されている。それは "me" であり、「me」の立場でも言語によって客体化されていない場合もあることがわかる。省略され言語化されていない場合こそが主観的な私だ。だからその言語化されていないことを言語化はできない。

さて本題の夢の話題へ戻ろう。夢にしても現実にしてもそうだ。夢は夢ではない。夢と認知された「ばれた」夢はない。現実<sup>19</sup>に困まれて夢と認識される。それまでは現実だったのだから。

同様に現実<sup>20</sup>は現実ではない。現実（のつもり）が覚めたら夢になるのだから、水槽の中の脳と同じだ。現実を現実たらしめるのは、現実感という感覚だ。現実と夢は相克で、お互いを飲み込んでしまう。現実を生きているとも言えない。これが現実だとも言えない。なぜならばその現実感が夢の中の相対的な現実感かもしれないから。「覚めてみると夢だった」と判断される。その同じ論法が今この現実だと思っている経験にも適用されてしまう。今夢を見ているとは言えないように今現実を生きているとも言えない。夢から覚めたら現実。覚めるまでの現実が夢。やはり使用中の今と言及中の「今」とは、言語で表現できない<sup>21</sup>のと同様に夢を使用しつつ、「夢」に言及することはできない。

### 3 現在も制作される

A君が先にB君に手を出し殴りつけ、その後もA君が一方向的にB君を連打している。しかし傍観者は止めるどころか歓声を上げている。A君は傷害罪の現行犯だろうか？法の解釈によっては傷害罪となりうるだろう。しかし歓声を上げている観客は「チャンプ、チャンプ！」を連呼している。そう、ここはリングサイドだ。チャンプAは暴力を振っていたのではなく、試合でその強さを発揮しているところだ。

「連呼している」、「ところだ」は、現在形である。われわれは過去だけを言葉で制作するのではなく、現在でさえ、言葉なしには経験することもできずに、現在を現在たらしめることができない。つまり言葉を使って制作することで初めて現在がある、今がある。そのような制作結果の今は儂い。輝かしい記念すべき今、ところがそれはついさっきの今に…、と変貌する。

ある著名な哲学者がこのようなことをどこかで書いていた<sup>22</sup>。要約すると「時間の速さは時速どれだけ？」というようなことだった。これは知的な意味においておもしろい発想である。われわれは時間を基準に変化を捉える。しかしその時間はどんな速さで変化をとげるのだろうかという問題提起に筆者には思われた。

もちろん、筆者は時間が伸び縮みしないと言いたいわけではない。そのような現象もスケールによっては起きるだろう。手のひらサイズや身の丈の世界もあれば、望遠鏡で初めて観ることのできる世界もあれば、顕微鏡によって初めて観ることのできる世界もあるだろう。それらはスケールが異なる。私が全速力で走ったり、私が乗れる乗り物では時間は伸びたり縮んだりはない。

### 4 夢：現実 = 使用：言及

私は朝、歯を磨き、洗顔し、散歩し、食事をとる。こんな人並みな悠長な恵まれた日常生活を実際に送っているわけではないが、そういうことにしておこう。それと同じように、

睡眠し、夢を見る。だから、睡眠中に夢を見るということは、日常的な行為であり、現実の出来事である。しかし、夢は現実と区別される。大森荘蔵によれば、それは現実感の差でしかない<sup>22</sup>。ここで私が指摘しておきたいことは、夢：現実 = 使用：言及の平行関係が成り立つことである。つまり平行な関係において、ふたつの関係が（まったく）<sup>23</sup>同じ構造を有していることである<sup>24</sup>。

## 5 結論

そもそも夢 (t1, r) とか夢 (t2, r) は何を言いたいのか？ここでは時刻 t1, t2 は問題にしないで「夢( , r)」の形に注目しよう。これの解釈は「現実感のある夢」だ。ではこれはやはり夢なのか。そう夢だ。だから現実感はあるても現実でない。「誰かが追いかけてくる。逃げ足だけは速いはずなのに、なぜか脚が重い。逃げなきゃ、もっと速く走れ。「あー、追いつかれる！」。あれは夢だったのか。そう今となってみれば、夢だったことになる。しかし覚める前は夢ではなかったはずだ。だから夢であることに無自覚な、その当時のそれを何とかうまく言い当てたいのだ。あれは現実「だった」と言えないのか？ 現実とは今さら言えないが、過去形で語ってもよいのではないか。

大森はこう言っている。「一旦まず夢をみる、そして後刻それを思い出す、というのではなく、夢を思い出すこと、それが夢をみた、ということなのである<sup>25</sup>」。この主張も言語の限界ゆえに無意味と化している。「夢をみたとは、夢を思い出すこと」。「夢をみた」と過去形で語るためには、思い出すことで初めて「夢をみた」ことになるころのモノを「思い出すことになる。その「思い出すことで初めて「夢をみた」ことになるころのモノ」をどうやって思い出すのか？ カール・ポッパーが授業中だったかに学生に「観察せよ」と言って、たぶんポッパーの期待どおりに「いったい何を観察するのか？！」と学生に言わせたように、いったい何を思い出せばいいのか？ いまだ「夢をみた」の前に夢はなく、想起で初めて夢となるから、夢を思い出せるはずはない。どうせ言葉にならないのだから、仮称でいいので、「夢の素」とか「夢の素描」とか呼んでおこう。

ここで本稿のタイトル「〈夢の使用〉と〈夢への言及〉」を再掲する。夢を素描しているさいちゅうのことを本稿では「夢の使用」と呼ぶ。そして大森の言う夢を思い出すことを「夢への言及」と呼ぶ。われわれは夢を使用することも夜にはよくあり、夢へと言及することも朝にはよくある。夢の使用には自然言語や視覚言語を用いているし、夢への言及にも自然言語や視覚言語を用いている。それぞれを夜、朝と分けて行うことはできるが、同時には使用と言及はできない。同時には原理的に両立しないが、それは言語（自然言語であれ視覚言語であれ）の仕様に基づく、言語の限界ゆえである。その仕様とは言語は二分法という表現方法であることである。同時には成立しないので、夢の使用から夢への言及へと遷移する。現実から夢への引きずり降ろしは、主人公が舞台から引きずり降ろされるようなものである<sup>26</sup>。

「見渡す限り一面の砂漠」と言っても、空があるから、それと見比べて砂がたくさんあ

るということだろう。薄暗い中で眼を閉じれば、より暗くなることで眼を閉じたことが確認されるが、真つ暗闇では、眼を閉じてもまぶたを動かした自覚はあっても、より暗くなることがないので眼を閉じたことが確認できない。

この喩えのように、見渡す限り一面の現実を言葉は表現できないし、見渡す限り一面の夢も言葉は表現できない。見渡す限り一面の現実には現実感という希薄な根拠に支えられているだけで、その現実には生涯覚めない夢でしかないかもしれない。かといって、「では(現実) + (夢) / 2」で、半分は現実で半分は夢の折衷だったんですね、というふうに折り合いをつける気にはなれまい。デーモンに全てを欺かされているなら、その欺かれた世界全体が現実である。例えば、 $1+1=3$ を含めて全ての算術が欺かれているなら、その世界では $1+1=3$ は正しいというべきだろう。

現実世界の中で、食べたり歩いたり勉強したりするように、その他には夢を見たりもする。夢を見ることも現実世界の中で実際に起こることである。つまり、現実世界の中で、食べたり歩いたり勉強したりするが、いっぽう夢を見たりもする。現実世界の中で、夢とそうでないこと(現実)が入り混じっているからこそ、この両者(夢と現実)の区別がつけられるからこそ、二分法である言語で「夢」とか「現実」と言い表せるのである。

だからこそ、見渡す限り一面の夢の世界の中では、「夢」とも「現実」とも言えない。夢しかないのだから、類比されるものがないのだから、それを何と読んでもよいだろう。例えば「現実」と言ってもよいし、「虚構」と言ってもよいだろう。

大森は「夢と覚めた世界とが比較される場合、夢にとって決定的に歩が悪い。相手の陣営の中でしか品定めされないのでもどうしても影が薄くなる」と言うが、私は「決定的に」歩が悪いとは思わない。現実と夢とは対称的だと思うからである。だから上記の現実こそ戻って来るべきヴァージョンを対称的に書き変えた命題も正しいと思う。もちろん夢も現実も対等だと言うからには「正しい」の意味は現実と一致しているという意味ではなくなる。

一度書いた文章を再掲し、対比的に見やすくする。

現実世界の中で、食べたり歩いたり勉強したりするように、その他には夢を見たりもする。夢を見ることも現実世界の中で実際に起こることである。つまり、現実世界の中で、食べたり歩いたり勉強したりするが、いっぽう夢を見たりもする。

夢の中で、夢を見たりするように、その他には食べたり歩いたり勉強したりもする。食べたり歩いたり勉強したりすることも夢の世界の中で実際に起こることである。つまり、夢の世界の中で、夢を見たりするが、いっぽう食べたり歩いたり勉強したりもする。

異論や違和感があるのは、下線部分ではなかろうか。夢の中で食べたり歩いたり勉強したりしたところで、それは夢の中であって、現実世界の中で食べたり歩いたり勉強したりするのは違うと言いたくなるだろうし、私もそう感じる。ただしその違和感は現実感の

程度問題として湧いてくるに過ぎないのではないだろうか。現実世界の中で（つまり実際に）食べるのと夢の世界の中で食べるのとでは、後者は現実感が薄い。だが、そうだろうか。ここで言語の使用と言及の区別を持ちだし、喩えと例えを一つずつ紹介しよう。

まずは言葉をガラス窓に喩える。E10 示範教室のガラス窓越しに外の風景が自然と見えている。ガラスは透明で窓を通して外を内へ運んでくるように、言葉というお盆は意味を運ぶが、縁の下の力持ちで透けていて見られることはない。この透明に機能しているさいちゅうが言語の使用中に相当する。

一方、あるとき風景のほんの一部だが、風景が見えづらいことがあった。その異変に対して、透明なはずの窓ガラスに近づき、それを凝視した。鳥のふんだろうか、何かが付着していたせいで、そこだけ外を内へ運んでいないのだった。ガラスという材質を透視せずに、ガラス面の手前を見る見方が言語の言及中に相当する。要はガラス窓を透視する見方がガラス窓を見るかの違いである。次には夢の使用・言及の例えを挙げる。

「いい発想だ。さっそく忘れないうちにメモしておこう。そして論文化しよう」と現実世界に持ち込む態度をとる場合、それは夢を使用している。私は夢を透視してその中で発想されたアイデアを見ている。夢は見えていない。夢は夢でありながら、私は差別しない。夢は透明はお盆となって、夢の世界から現実世界へとアイデアを運んでくれる。言葉が使用中には意味を運ぶのと同様に、夢も使用中には何かを輸出してくれる。

一方、「夢にしてはよくできた夢だ。場面の遷移に整合性がある、論理的な飛躍もない。一貫して私は観客席から夢という映画を鑑賞する立場にいて、映画内に登場する立場には入れ替わらなかった。いま思い出しても現実味のある夢だった」という感想を抱く場合、それは夢に言及している。夢は（何度か）鑑賞される映画のように見られていて、作品として見られている。映画という作品を観客席という安全地帯から鑑賞していて、追いかけられたり逃げたりする心配はない。

## 6 おわりに（柴田先生の思い出）

「おーいNTT、いつもいいスーツ着てるなあ」。学会ではスーツとネクタイ着用と思い込んでいた私に、学会なのにサンダル履きでジーンズの、しかしおしゃれな帽子のいでたちの気さくな先生から「ポーン」と自己犠牲に関する論文（柴田正良[1999]）<sup>27</sup>を手渡された。

私が金沢大学理学部を卒業した翌月に着任されて、入れ違いで知るよしもない先生に引き合わせて下さったのは砂原先生（現金沢大学名誉教授）である。数学科出身の私であるが、柴田先生が所属の学会に入会し学会発表するなど、哲学会へ出入りするようになった。その後、柴田先生に論文指導をしていただきたくて金沢大学大学院社会環境科学研究科に入学した。今、理事となられて教授を退職された柴田先生は、私を指導してくださった頃にはすでに評議員として忙しく活躍されていたように記憶している。そのような中で私の博士論文を指導して下さったのだった。

リアリティのある思い出話を挙げると、北福利食堂の二階で、かき込むように忙しく食されながら、その割り箸で「ここだけれども」と論文のある箇所を指されては、博論の指導をして下さったことを今も思い出す。そのような恩師が退職されるのだから、私としては思いの限りの記念号を執筆しようとアイデアだけは大いに浮かんだ。

まず思い浮かんだのは、「解説座談会——大森哲学の魅力を語る」である。私の記憶では、柴田先生（当時青年）は、高校時代はサルトルやボーボワールを、大学時代に大森荘蔵を読んでおられたと以前伺ったことがある。その大森荘蔵の4人の高弟（飯田隆、丹治信春、野家啓一、野矢茂樹）による座談会で、2011年8月20日に平凡社会議室で行われた。それは『大森荘蔵セレクション』（大森 荘蔵[2011]、平凡社）という論文集の終りのpp. 458-93に収録されている。これを踏襲したかったが、われら弟子達の中から同志を募ろうにも、そのような率先力・とりまとめの能力は私にはなく、一人で何かをこなそうと奮い立ちながらも、自分の胸の内だけでの企画倒れに終わった。

次に思いついたのが、上記の自己犠牲に関する論文（柴田正良[1999]）で、これに関して自分なりに何か書けないだろうか、と何度か読んでみた。しかし、とても何も書けそうにない。そこでこの論文（柴田正良[1999]）以降発表の論文・著作で、柴田先生の独創的な「没入型自己犠牲」を取り上げているものにすがりついてみた。つまり柏端達也 [2007] 『自己欺瞞と自己犠牲』（筑摩書房）を読んでみたが、ますます何も書けそうにない。

こうなったら、やけくそで「そうだ、論文一本を取り上げて、正面から論じようとするから、難しいのであって、研究業績の中からいくつか勝手に選定し、それぞれに少しずつ何か書けないか」と思い到った。質ではなく、量で勝負しようと思き直ったわけである。そして先生からいただいた『ロボットの心：7つの哲学物語』（柴田 正良 [2001]、講談社）や「ゾンビは論理的可能性ですらないのか？ —— チャルマーズに対する pros and cons ——」<sup>28</sup>などを書棚から取り出し、手元にある比較的最近の論文「記憶喪失と世界喪失——水槽脳になったばかりの人が持つ記憶は元の世界を指示できるのか？——」（金沢大学哲学・人間学研究会編『哲学・人間学論叢』第3号 pp. 17-26）を読んでみるが、やはり何も書けない。1本の論文でも歯が立たないのだから、たくさんではなおさらである。

「どうしよう、そうだ」。柴田先生は、比較的若い哲学者達からも、彼ら彼女らの論文・著作で、よく謝辞を述べられているのを見かけていたことを思い出した私は、それらの論文・著作のテーマで間接的に柴田先生の哲学について何か書けないかと考えてみたが、それもやはり無理だった。

結局、実際にはこの小論を書き上げるのに精いっぱいであった。と言いながらも、夢に関する現地取材をするために、一日17時間も寝ることが数日もあったことを白状しておく。  
(金沢学院大学 基礎教育機構・准教授)

注

- 1 大森荘蔵 [1976] 初出「夢まぼろし」『大森荘蔵セレクション』(2011), 平凡社) 所収 p.18.
- 2 「(略) 対象言語とメタ言語という区別が, 言語表現の使用と言及という区別と一致すると考えるまじがいがあるように思われる (略)」(飯田隆[2002])。筆者はこの引用から「区別の区別」の重要性を強調したいのであって, 大森がこの「区別の区別」を混乱しているとは全く思っていない。
- 3 当然, 「自分が一度も経験したことがなければ, それが経験として起こり得る論理的可能性は零だ」という考えを私が持っているのではない。そして, 私に代わって「夢の中で夢を見た」と私に語ってくれる貴重な証人が毎年数名いる。しかし残念なことに私の認知能力の不足で, 彼ら彼女らの「夢の中で夢を見た」という話が2重の入れ子型構造になっていて, 「その夢が…」という時に内側の深い夢なのか, それとも外側の浅い夢なのかを区別できずに, 理解できないままである。そこで話を整理するために新規に導入した「夢 (t,s)」を使って話をしてほしいのだが, たぶんもう話を聞かせてくれるようになるだろう。注5で集合Sを定義してあるが, sは集合S(と言ってもdとrの二つから成る)の自由変数である。だから, sはdであったり, rであったりする。しかし他の値をとらない。
- 4 夢をいま初めて制作したと言っても同じことである。なぜならば, 二分法の表現である言語を用いても「夢」も「現実」も無意味でしかないからだ。
- 5 覚めに気づいたが, そのあとでもっと覚めた。夢の中の夢という入れ子構造があり, 夢には深さ(睡眠の深さではなく)があるので, その深さをレベル表記しようかとも思ったが, そのレベルを添字で明記することはやめて, その代わりに時刻を明記して, 時刻の関数的な表記にした。なぜならば, 何も夢のレベルを明記しなくとも夢見た時刻から容易にレベルがわかるからである。こうすれば夢見た時刻と夢のレベルの両方が把握される。

時刻t1と時刻t2の前後関係は, 時刻t1がより昔で時刻t2がより新しい。時刻とレベルの関係は, 夢(t1)は昔に見られた夢で夢(t2)の中へ持ち込み可能である(逆向きはありえない)。だから夢(t1)は夢(t2)よりもレベルが深い。程度問題だが, 夢(t1)は夢(t2)よりも夢見心地である(現実味が無い)。もともと, 夢(t1)も夢(t2)も覚めてしまえば, 夢でしかない。

ここまでは夢を特定する要素として時刻だけに注目していたが, ここからはさらにその要素として現実味を表す要素(「今となっては」)を導入し, 「現実から夢へ」の変遷を表せるようにしよう。「今となっては」夢を"d"で表して, 今のところ現実(夢にも疑わず, 現実が夢かを気にもかけないくらい現実感がある場合も含めて)を"r"で表わすことにする。dとrの2値が登場したので, 一応これらのみを構成要素とする集合を定義しておく。S={d,r}である。

しかしこの「今」がいつなのかにも依存して, 値がrになったりdになったりする。つまり, rもdも今(t)の関数(値)となろう。では今とはいつなのか? 読者が読んでいるタイミングで変わってくる。初めて読む時にrであっても(筆者もその時はrと解釈されることを願っているが)再読ではdに再解釈されることになるだろう。なぜならば, 初めて読んだ後で, 覚めてしまって夢(d)だということを知ってしまったからである。
- 6 と言っておきながら, 言葉を絶した真意をこっそりと注釈する。言葉を絶しているのだから, 当然, 無意味な表現になる。夢は夢にあらず。現実には現実にあらず。

- 7 <夢を使用すること>と<夢へと言及すること>の区別は重要である。われわれは、夢を使用することも毎夜のようにできているし、夢へと言及することも毎朝のようにできている。しかしそれら両者の区別を言語化はできない。夢を使用しているさいちゅうには、それが夢とは自覚していないのだから、それを「夢」と呼ぶのはおかしい。「現実」と呼んでもいいくらいだ。しかし覚めてしまえば、それは「夢」と呼ぶしかない。だが、それは覚めた時の話であって、夢を使用しているさいちゅうにはそれはやはり現実だったのではないか。上記のように、夢を使用したことを過去形で語ることが過去制作なのではないだろうか。
- 8 「はっ」と目が覚めた時刻 t1 に現実感を伴って経験（使用）した記憶があるが、今となつては夢 dream として言及されている夢のこと。
- 9 二度目に目覚める t2 の直前までは reality があるがゆえに現実だった。しかし二度目に目覚める t2 の直後（以降、今のように論文で言及されている時にも）では相対的に夢 (t2, d) となつてしまうが、そうなる前の地位、状況のことである。
- 10 布団の上で目覚めた私にとっては、夢 (t2, r) はすでに夢 (t2, d) と化していて、使用中の夢ではない。それが使用されていたことを想定はできるが、それは過去を制作することの一つであり、過去形で語られるしかない。
- 11 夢 (t2, d) の中の出来事の「はっ」と目が覚めるよりも前の「寝てしまう前」の部分は、夢 (t2, r) になかったようだ。しかしその眠りから目覚めたときに「あたかもシャワーを浴びていた」かのように夢 (t2, r) の中で制作されたのかもかもしれないし、布団の上で目覚めてから始めて制作したのかもかもしれない。
- 12 夢とは気づかずに夢のまっさいちゅうを本稿では「夢の使用」中」と呼ぶ。
- 13 t1 < t2。t1 が先で t2 が後という日本語表記による補足は余計な誤解を招きそうだが、誤解を承知というよりも、むしろもてあそぶように、日本語の「先・後」関係のおかしさを指摘する。「先日はありがとうございました」の用法では時制に関して「先」は過去のことだが、「もっと先を見越して計画的に」と言えば、「先」は未来のこと。単に言葉は多義的ということなのだろうか。そう言えば「結構です」のように受け入れも断りにもとれる言葉はある。
- 14 「一度目の夢 (t1, d) のことは夢」の時刻の関数的な表記の「夢 (t1, d)」は、その場の個々の夢であり token である。いっぽう、時刻の関数的な表記のないまうの「夢」は、type である。それは夢というカテゴリである。
- 15 知らなかったら現実だと思ひ込んでいるだろうから、夢の中へ無自覚にも現実を持ちこんだことになるので、夢の中の現実というべきことになってしまう。しかし私の夢の場合は、夢 (t2, r) の中には夢 (t1, d) が夢として持ち込まれた（能動的ではなく受動的に）。
- 16 二度目の夢 (t2, r) の中では関数のような不自然な語は用いなかったが、本稿の表記では夢 (t1, d) となる。
- 17 同じ夢を見たとしても、私が夢を見てそれを言語化しつつ制作し、妻も夢を見てそれを言語化しつつ制作したとして、それをお互い相手に語る（夢を再生する）ことなしには共有はできない。「複数の人が同じ夢を見る」の意味は、複数で同じ夢を映画館でのように共有して一緒に見るのではなく、各

自がそれぞれ一人ひとりで見た夢が同じ内容だったということである。つまり一つを共有できるか否かという点が夢と現実の差に思える。

しかし先のスパイの例のように、任務完了で逃亡した男が今でも本当に私を愛してくれていると認識することは自由である。同じ現実を共有しつつ、認識は全く異なるということも考えれば、一つを共有できるか否かという点が、共有できるならば現実で、共有できないならば夢とは言いきれない。なぜならば、現実世界でも共有しているという思いこみがあり、「逃亡した男が今でも私を愛してくれている」という女の認識は現実と一致しない（確かに起きた場合は現実の世界で、その現実世界での出来事だが、実はその女がそのスパイから愛されているということは、少なくとも逃げたそのスパイにとっては現実ではない）。

- 18 永井均が他者の「私」と区別したく、しかし語りえぬ「私」を<私>と表現せざるをえないように。
- 19 明晰夢は本稿では論じない。なぜならば、善かしからずんば悪かを論じるときに、偽善や悪ぶり（悪ぶること）を混入させるようなものだから。それはそれで大事な問題だが、1本路地に入った別の問題である。
- 20 「使用中の今」とは使用・言及の区別がついていないので、区別をつけたいなら「使用中の「今」とすべきだが、それでは言及されてしまうので、敢えて「使用中の今」と、せめて引用符内だけでも「今」を今と見せかけておく。
- 21 ある著名な哲学者とは野矢茂樹のことである。「要約すると」は、言い訳で出典も見つからず引用ができないだけである。筆者のオリジナルの発想ではないことを注釈しておく。
- 22 大森 荘蔵 [1976] 初出「夢まぼろし」『大森荘蔵セレクション』所収 p.16を参照した。
- 23 「同じ」と「まったく同じ」は同じなのか？「同一」と「類似」とは差異がありそうだが、類似しているのかという問題は、本稿ではなく別に論じたいと思う。筆者にとって、この問題の由来はウィトゲンシュタインが「同一性の悪魔」と呼んだ問題である。
- 24 ここは注意喚起しておくべき箇所であろう。ふたつの関係は、関係1と関係2との関係を扱うメタ関係だからだ。日常生活でわれわれ、例えばAさんはBさんと仲がよいが、AさんはCさんとは仲がよくない、と言ったりする。これはフラットな水面上の話である。何もここでA、B、Cの3点で一平面が確定するという数学上の必要十分条件を言おうとしているわけではない。だから、登場人物はさらにDさん、Eさんに登場してもらってもよい。関係(Aさん、Dさん)、関係(Bさん、Cさん)、関係(Cさん、Eさん)…等などは、すべて同一の階層にある関係である。関係を構造づけている構成要素が(Xさん、Yさん)の対である。それらは単なる二項関係である。そしてここで問題にしているのは、二項関係と二項関係との間の関係間の関係である。
- 25 大森 荘蔵 [1985] 初出「過去の制作」、『大森荘蔵セレクション』所収 p.379より引用（傍点は大森による）。
- 26 中村 直行[2015] pp.55-7の注(27)参照のこと。
- 27 柴田正良[1999]「癒すべき病いとしての自己犠牲：田村論文「自己犠牲の倫理的的分析」についての一試論」『金沢大学文学部論集・行動科学・哲学篇』第19号 p.161-75）。

<sup>28</sup> 柴田正良[2003] 平成12・13・14年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書『コネクショニズムの哲学的意義の研究』(研究課題番号12410003)所収 pp.47-66。

#### 参考文献

飯田 隆[2002]『言語哲学大全IV 真理と意味』勁草書房。

大森 荘蔵[2011]『大森荘蔵セレクション』平凡社

中村 直行[2015]『沈黙と無言の哲学 ——〈語りえぬもの〉の語りえなさを語る——』大学教育出版